

■ PCN だより

PCN Volume 62, Number 3 の紹介 (その 1)

2008年6月発行のPCN Vol. 62, No. 3にはRegular Article 13本, Short Communication 6本, Letter to the Editor 6本の計25本が掲載されている。Regular Article 13本中に海外の論文は4本とShort Communication 1本です。

Regular Article

1. Predictors of violent behavior among acute psychiatric patients; A clinical study

Mario Amore, Marco Menchetti, Cristina Tonti, Fabiano Scarlatti, Eva Lundgren, William Esposito, Domenico Berardi

急性精神病状態の患者における暴力行為を予測する因子

【目的】精神科診療において患者の暴力行為を予測することは重要である。本研究では入院中の急性精神病性障害患者における暴力行為の予測因子を検討した。【方法】1年間に閉鎖病棟に入院した連続患者374名について、面接し、患者背景、社会的状況を記録するとともに、BPRS (Brief Psychiatric Rating Scale) による評価と、過去の暴力行為、構造化面接によるSDM-4診断を行い、入院中の暴力行為はOvert Aggression Scale (OAS) で評価し、入院過去に以前に言語的暴力行為があった患者群、身体的暴力のあった群、暴力行為のなかった群とに分けて比較検討した。【結果】入院前の暴力行為は、男性、物質乱用、陽性症状と相関していた。身体的暴力行為を予測する最大因子は、過去の身体的暴力行為の既往であった。入院中の身体的暴力行為の持続はBPRSの高得点および思考障害と関連していた。

さらに、BPRSの敵意-疑念の高得点は、言語的暴力から身体的暴力への移行を予測する因子であった。【結論】暴力行為の既往と精神病理学的評価は、入院中の暴力行為の予測に重要である。

2. Beliefs about the genetics of suicide in Canadian students: Cross-language validation of the Beliefs in the Inheritance of Risk Factors for Suicide Scale

Martin Voracek, Maryanne L. Fisher, Lisa Mariella Loibl, Hasantan, Gernot Sonneck

カナダ人学生における自殺行為を規定する遺伝的要因についての意識調査——Beliefs in the Inheritance of Risk Factors for Suicide Scale (BIRFSS) 調査票の言語間妥当性の検証——

自殺行為の背景には、遺伝的要因があることが指摘されておりその研究が進められている。自殺をめぐる、養子家族、ゲノムスキャン、地誌学的、移民、分子遺伝学的、姓名学、双生児研究など多方面からのアプローチなされているが、自殺予防にかかわる専門職種あるいは一般人における知識は、これらの研究成果を十分には反映していないと考えられる。

本研究では新たに開発した22項目からなるBeliefs in the Inheritance of Risk Factors for Suicide Scale (BIRFSS) を用いて自殺行為と遺伝との関わりについての考え方を評価した。BIRFSSはもともとドイツ語の質問表であるが、今回はカナダの学生288名(女性70.5%, 心理学専攻58.0%)について評価した。因子分析では、前回と同様の主要な因子が抽出されたが、検

査項目間の一致率は、前回のオーストリア人を用いた解析と比較しても低かった。自殺の背景にある遺伝的要因についての考え方は複雑であることが示唆されたが、カナダ人のサンプルを用いた解析でもオーストリア人による解析とも一致しており、BIRFSS は、異なる言語間でも有用であることが示された。カナダ人の解析結果からは、BIRFSS 得点は自殺行為についての知識、遺伝についての知識と相関しており、性格の 5 因子、自殺の説、コントロール可能性、社会性、宗教、政治思想などとは相関していなかった。

3. The value of interleukin-12B (p40) gene promoter polymorphism in patients with schizophrenia in a region of east turkey

Ulku Ozbey, Esra Tug, Murat Kara, Mustafa Namli

トルコ東部の統合失調症患者における IL-12B 遺伝子多型

統合失調症の病態に脳内免疫系の活性化が想定されており、サイトカインの関与が考えられる。さらにサイトカインはドパミン、ノルアドレナリン、セロトニンなどの神経伝達物質とのクロストークがあることも知られている。これまで統合失調症患者の血清中の IL-12 の異常を示した報告があるが、IL-12 遺伝子多型について調べた報告はない。そこで、本研究では、統合失調症患者における IL-12 遺伝子のプロモーター領域の多型について検討した。【方法】DSM-4 による統合失調症患者 100 名と健常対照者 116 名について、IL-12 遺伝子多型を PCR 法により調査した。【結果】統合失調症群では健常対照群と比較して遺伝型、アリル頻度ともに有意差が認められた。【結論】この知見は、統合失調症患者脳内における免疫系の活性化、とくに Th-1 細胞系の活性化を示唆する。本報告は統合失調症などの精神疾患において免疫系が関与している可能性を分子レベルで示した最初の報告であり、精神疾患の病態の理解、治療ターゲットの開発などに寄与しうると考えら

れる。

4. Prediction of postpartum depression by sociodemographic, obstetric and psychological factors—a prospective study

Yong-Ku Kim, Ji-Won Hur, Kye-Hyun Kim, Kang-Sub Oh, Young-Chul Shin

産後うつ病の予測因子——社会背景、産科要因、心理要因についての前向き検討

産後うつ病は重要な疾患であり、本研究では産後うつ病を予測する因子について検討した。妊娠 24 週以前の妊婦 239 名を登録し、その中から、産後 6 週の時点での産後うつ病 30 名と非うつ病 30 名を選択した。この 60 名について妊娠 24 週目、産後 1 週目、産後 6 週目に、Edinburgh Postnatal Depression Scale (EPDS)、Beck Depression Inventory (BDI)、Beck Anxiety Inventory (BAI)、Rosenberg Self-Esteem Scale (RSES)、Marital Satisfaction Scale (MSS)、Childcare Stress Inventory (CSI) を用いて評価した。

産後うつ病の発症について、社会的患者背景、産科要因に統計的に有意な差異を認めなかった。妊娠 24 週目の MSS 得点 ($p=.003$) に有意差があり、妊娠 24 週目と産後 1 週目の EPDS 得点 ($p<0.001$; $p=.002$)、BDI 得点 ($p=.001$; $p=.031$)、BAI 得点 ($p<.001$; $p<.001$) にも有意差があったが、妊娠 24 週目の RSES 得点に有意差を認めなかった ($p=0.065$)。「出産直後の抑うつ」(出産 1 週目の EPDS と BDI)、「不安」(出産前の BAI)、「人間関係のストレス」(出産前の MSS と出産 1 週間目の CSI)、および「自己評価」(出産前 RSES) の四つの因子について回帰分析を行ったところ、四つの因子を出産前の抑うつ (出産前 EPDS と BDI) に加え合せても、その寄与は認められなかった。したがって産後うつ病を予測する心理学的要因は、出産前の抑うつであり、ほかの心理学的要因の寄与は認められなかった。

Short Communication1. Temporal cortex dopamine D_{2/3} receptor binding in major depression

Soili M. Lehto, Jyrki Kuikka, Tommi Tolmunen, Jukka Hintikka, Heimo Viinamäki, Ritva Vanninen, Kaisa Haatainen, Heli Koivumaa-Honkanen, Kirsi Honkalampi, Jari Tiihonen.

大うつ病における側頭葉皮質のドパミン D_{2/3} 受容体結合能

【目的】大うつ病患者におけるドパミン D_{2/3} 受容体結合能を ¹²³I epidepride をリガンドとして評価した。【方法】10名の大うつ病患者と10名の対照健常者について SPECT 検査を行った。【結果】大うつ病患者群では D_{2/3} 受容体結合能の値と21項目 Hamilton depression rating scale の得点とが相関していた。【結論】大うつ病の側頭葉皮質におけるドパミン系の異常が示唆される。

(文責：武田雅俊 PCN 編集委員長)
